

青年の樹(二)

石原 慎太郎

角川書店

昭和35年5月20日 初版発行
昭和37年1月30日 十版発行

青年の樹二 定価 三三〇円

著者 石原慎太郎

発行者

角川源義

印刷者

中内佐光

製本者

鈴木俊一

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見町二
振替 東京一九五二〇八番

曉印刷株式会社 鈴木製本所
落丁・乱丁本はお取替え致します

著者との
申し合
わ
せにより
検印
廃止

青年の樹
(二)

装
幀
伊
藤
明

「雪葉さん、僕です」

武馬は一步前へ出た。

身構えるような表情が雪葉の顔に走った。

顔見知りとはいえ、往来で若い芸者を呼び止めてみるとどうもなんとなく面映い。

「先日は思いがけないところで失敬しました」

武馬の方で言った。言われて雪葉は黙って眼を伏せる。こうやって見ると、杉ほどではないがこの女も元気がない。

「お暇だったら一寸お話があるんですが」

雪葉は当惑したような表情になる。

「あ奴の、杉のことなんです」

彼女は眼を上げ驚いたように、次の瞬間なぜか咎めるように彼を見つめたまま頷いた。

武馬は先に立って歩き出し、通りの小さな喫茶店に入った。

「杉という奴は、学校じゃおそらく誰も友だちがいないと思うんです。ただ僕はあることで彼を知っている。その彼がこの頃全然元気がないのを見ておせっかいみたいだが気の毒で見ちゃいられないんだ。僕から見ちゃあ奴は全くつまらん目的をたてて自分で自分を金縛りにしている。その挙句、この頃じゃいつもぼんやりしていて、今日なぞ図書館で一人ぼさとしてるところなんかまるで

ノイローゼみたいだった」

雪葉は黙って眼を伏せたまま聞いている。

「僕はね、そんなあいつをもう一度グラウンドに引き戻して思いっきりやらしてやりたいんです。だからもし、それにあなたの力が借りられたらと思って」

雪葉は黙ったままますます眼を伏せたきりだ。

「でもこの前横浜で会った時は、あなたもあいつもあまり楽しそうじゃなかったですね」
思いきって言ってみた。

「私が悪いの、みんな」

突然口走るように彼女は言った。

「どうして？」

「杉さんがあなたのおっしゃるようになったのは、私のせいもあるのです」

雪葉は初めて顔を上げて武馬を見た。

「あなたが私たちのことを心配して下さっているのを、たった今お師匠ししやうさんからお聞きしました」

「そうですか。僕あその、あまり、むつかしいことはよくわからんけど、あの男を引き戻してやれるならあなたたちのために何でもしますよ」

雪葉は頷き、彼を見ながらゆっくり微笑した。その微笑はどうも、大変まが寂し気に見えた。

「有りがとう。でも人さまの親切に頼ることが出来ないこともありますわ」

「あなたの場合は？」

雪葉は横に首を振った。

「でももういいんです」

「もういい？」

「ええ。この前横浜で逢った時に私からあの人によく頼みました。出来ないことはしようがないでしょう」

雪葉はもう一度先刻と同じように微笑した。

「私からもめり込んだことだけど、もう一度私の方からお願いして別れました」

「え？」

「もうお互いに会うことはありませんわ——」

「杉はそれを承知したんですか」

雪葉は武馬に向って何かを言いかけて唇をとじるとそのまま下を向いた。

「家のお母さんからも釘をさされてましたの。でも言われなくなつて、元々無理な話ね。とんだ新派狂言よ。向うもこちらもうぶすぎたつて訳かしら」

急に運っぽになつて言った。

「そんな言い方はいけないな。僕は嫌いだ。いろいろ立場ということはあるだろうけど、あなたたちの問題はそういうものを超えて考えるべきものじゃないの」

「そうは思つても、結局誰にもそれを出来やしないわ」

「むかし、しかし君がそう言つても杉はそれで心から納得しましたか」

雪葉は小さく頷いた。

「馬鹿な！ 本当にあいつはそれですむんですか。あなただってどうなんだ？」

「忘れるわ——」

「忘れる？」

「無理してでも」

「馬鹿な」

「それじゃ、それじゃあ誰が、あなたが私たちの間をどうして下さると言うんです？」

言われて武馬は黙った。

どうも俺は余計なことに首をつっこみすぎるとも思った。しかしまた、図書館で見た、半分気ぬけたような杉を思い出した。嘗て武馬もテレビや新聞で見たことのある、あの颯爽たる杉の長身の面影は一体今どこにあると言うのだ。

「——ほかの人は知りませんが、私には、私一人では形のつかないいろいろなことがあるんです。そんな女を相手にしたあの人の不運なのね」

「そんな君！」

「そりゃ、私だって——」

武馬の眼に向って言い返そうとしながら雪葉はあきらめた。

「結局——」

言いかけたが結局何を言っているのかわからなかった。が、

「——結局、金ですか？」

思いきって言った。

雪葉の眉が激しく動き、強く問い返すような視線を返しはしたが、次の瞬間その眼は元のように伏せられたきりだった。

雪葉は黙って立ち上った。眼で追う武馬にゆっくり微笑して、

「いろいろ有りがとうございました」

会釈しそのまま店を出ていった。

追いかけてかける言葉のないまま武馬は坐ったまま彼女を見送った。

「畜生——」

思わず言ったが、それを直接何に向けていいのかがわからなかったのだ。

家に帰りおさらいを終えていたお匠さんにたった今のことを話した。

「こんなことが結局どうにもならないというのは、一体どういふことなんだろう」

「それが浮世さ。あんたはそれでまたひとつ勉強をしたんだよ。あんたの持つてゐるその正義感だね、その内フィジカルな条件が変り、実社会での人間関係の経験が重なるにつれてもう少しねれたものになって来るのさ」

紫雨師匠は武馬に向って例の心理学的解釈を加える。

「どういふことです？」

「つまりね言い換えりゃ、そうなることであんたたちは人間の連帯、つまりつながりということの觀念を段々喪くして本当の孤独な人間になるといふことだよ」

「僕はどうでもいいけど、杉はどうなんです。みじめな話だ」

「なおさら私の言つた通りじゃないか」

「雪葉さん、お師匠さんに何か言いましたか？」

「いいや、私がこないだあんたに言つただけのことさ。そんなものゝ恋愛のためには本当はなんの関りもない筈のことなんだけどね。あんたたちは一本氣にそう思うだろう。それはそれでいいの。けど恋愛というものはね、人の世の中の出来事である限り結局二人きりでは出来るものじゃない。成るにしろ、壊れるにしろ、考えたくもない二人の外側何かがそれを決めてしまうんだ」

紫雨師匠は煙草に火をつけ吸い込んだ煙をゆっくり出しながら言つた。

「だけど覚えときなさい。いくら他のものが氣に病んでやっても、不幸せな戀愛てのはね、やつてゐる当人たちが誰よりも、倍も倍も倍もつらいんだよ」

「当り前です」

「当り前のことがなかなかわかりやしないんだ。もっともあんたたちがそんなことにならないように私あ心から願つちやいますよ」

言われて武馬は頬が一寸熱くなった。

「でもあの二人はどうして知り合つたんだらう。妙といや妙な組み合わせだな」

「案外そんなものさ。杉さんと言つたねその人、男がそんな具合だから、案外並の素人より芸者ととんとんといったりするもんさ」

「けどどうやって——」

「なんでもこの春先ね、今流行りのドライブでさ、雪葉たち若い妓ばかりで車を借りて湘南へいったんだそう。この頃の若い妓じゃ三味線持つよりハンドル持つ方がなれてるてなもんだ。出先

の鎌倉で車が故障して手がつかずに放り出して、くじで当った雪葉だけが残ってみんなが誰か人を捜しに、あちこちいったらしいんだ。その時に通りかかった例の杉さん（の）かい、その子が覗いて車を直してくれ、運転してみんなのところまで追っかけていったのさ。ところがいき違い、いき違いでみんなに会えない。雪葉は運転出来ないし、そのまま向うは迷惑なのを無理に頼み込んでみんなを捜しながらなんのことかない半日二人だけでドライブをやったという訳さ」

「なるほど」

「やっと仲間を見つけてお札に夕御飯に誘ってさ、聞いて見りゃ大きな病院の後とりで東大の学生さんでことだろう。みんなには文句半分にひやかされてる内に、雪葉は雪葉で悪い気じゃないやね」

「そうだろうな」

「悪いことにあその二人がまた東京のどこかでいき会ったということ。いくら学校で一番になろうてえ学生さんでも男は男だよ。雪葉にしたってお座敷で会う種の相手じゃない。合縁奇縁、それからはとんとんとんだあね」

「それが今になってがたと来たんだな」

「という訳だね。なんにしろ聞いて見りゃ雪葉もこのことじゃ随分まじめな気持だよ。それに相手が相手だ。このまま別れるたって、男の方だって並の嘆きじゃすまされまいよ」

「その通りです。今日だって見たら半分病人だな。横浜の逢瀬がやっぱリショックという訳だ」

「そうねえ」

「と言っていないで何か手はありませんか」

「駄目だね。そういうことあ喧嘩すけだちみたいにあ簡単にいきあしないよ」

「金か——」

「やな話だがね」

紫雨師匠は指の煙草を灰皿にひねりつけた。

梅雨の雨が少なく、雨の合間にグラウンドで練習は続けられた。

練習の帰りにもグラウンドの辺りを眺めて見たがもう杉の姿は見かけなかった。武馬は彼があの時どんな気持で仲間の練習を覗いていたのかを想像してみた。

或いは思うにまかせぬ恋愛をふり切るために野球への熱中を考えていたのかも知れない。しかし、結局彼は代りに以前の誓言通りにそのエネルギーを勉強にそぐことに改めて決心したのだろう。

その結果は武馬が図書館で見た、自失してただ雨ばかり眺めているあの情ない姿だ。

青春というものは費されるべきものだ。そのエネルギーの四散する姿が青春なのだ。勉強に、歓楽にそれぞれの青年が自分の青春を費していく。あるものはいきすぎ、あるものは節度に、しかしいずれにしろそれは限られた尊い時間に違いはない。青年の誰が何に向って自分の時代を賭けるかは彼の決めるところだろう。

しかし、ただ一つ言えることは、歓楽なき青春というものは絶対に有り得ないのだ。

杉はそれを知るべきだ

武馬は思う。

武馬にもどうとはわからぬにしろ、杉がその恋愛のために今と違って、もっと猪突し、攻撃し、

自らの身を叩きつけて碎けるといふのなら、武馬はそれを許せそうなきがする。他の仲間だって同じだろう。そんな杉を誰も尊敬こそしなくても決して嘲笑いはしないだろう。

しかしもし杉が今のまま、自分の青春の大きな出来事があるものに無理にすり代えて自分の眼をふさぐというのなら、たといそれが成ったにせよ、彼が願った通りに一番の成績を上げたにしろ、それを嘲笑いこそすれ、誰が尊敬を払うだろうか。

この若い時代にあつては、成績の優の数よりも美しい愛人、たくましい腕力、不道德な機智といったものの方がはるかに価値があるのだ。

誰かがそれをあの男に言つてやる必要がある。言葉ではなしに、もっと乱暴に、あの猫背の上の首っ玉をつかまえて小づき廻すようにしてそれを叩き込んでやればいいんだ。

思ったが実際にどうやっていいのかは武馬にもわからなかった。

今の武馬にとって、梅雨は一向にうっとおしい雨ではなかった。しかしあの杉にとってこの雨はどうにもならぬ気のめ入りに違いない。

甘んじて受け入れ、自分をすり代え、徒らに考えこむのがどうして青年と呼べようか。

最近グラウンドだけではなく、杉の姿は学校の中でも余り見かけなかった。

杉と同じクラスだというラグビー部の仲間に訊いてみた。その男は武馬が聞くまで彼が嘗つての甲子園のヒーローであることを知らずにいた。

「あいつがねえ、しかしなんで野球をやらねえんだ」

その男も言った。が武馬は黙っていた。

杉は最近教室にも余り出て来ないと言う。

「あいつはクラスで幽霊って仇名^{あだな}だったぜ。尤^{もっと}も当人は知ってるかどうか知らねえが」

それから数日して武馬は杉をまた図書館でみつけた。この前と同じように雨が降っている、夕方になると室内は急に暗くなった。読書している学生たちはみんな眼の前のスタンドをつけ出している。その中で、たった一か所、杉の机にだけ明りがともっていない。それでかえって武馬が気づいた。本を読むでもなし睡るでもなし、机に向って両手で頬杖^{ほづえ}したまま、薄暗い机に向って杉はじっと動かずに坐りつくしている。仲間が言っていた幽霊という仇名に現実感があつた。

声をかけようと思ったが何を言っているかわからず、武馬は黙ってその背を見守っていた。そして杉の後姿には、何かもう他人をよせつけないような若さから遠く離れてしまったものが感じられた。

三日しての午後部室で、杉の仇名を教えてくれた部員が武馬に、

「おい、幽霊が轢^ひかれたね」

「――？」

「お前友だちなんだろう。知らねえのか」

言って朝刊を投げてよこす。

「三面に出てるよ。昨夜、横浜で、雨の中でタクシーにやられたらしい。本当に幽霊になるんじゃないのかね」

新聞をひったくるようにして見た。仲間が言った通り、

『東大生自動車事故』

の見出しで杉の事故が報されてある。

『昨夕七時二十分、県立図書館前の通りで東大生杉××君が坂を上りきり下りにかかった港交通タクシーにはねられた。付近の大塚外科病院に運びこまれたが危篤である。運転手の話によると、視界は良くはなかったがその時一台きりの車のライトは見えた筈で、衝突の瞬間、警笛にもかまわず、同君はすべったようにして倒れ込んだと言う。酔っていたのではないかとその点を調査中——』

とあった。

「馬鹿な奴だ！」

思わず声に出た。

記事の最後の数行が武馬の心を捉えた。

「あいつはその瞬間、避けようとせずにそのまま車に向っていったんだ！　そうに違いない！」
と思った。

「死ぬんだろうか——」

「打ちどころさ。危篤だからな」

仲間はこともなげに言った。

「やっそこ大学へ入って、車と衝突でペアじゃ合わねえよな全く」
もう一人が言う。

「馬鹿な、馬鹿な、馬鹿な野郎だ！」

図書館で見た後姿がもう一度思い出された。

「大塚外科てのはどこだ」

「見舞いにいくのか？」

仲間が訊いた。

「見舞いにいったところで死んじまってるんじゃないのか」

「可哀そうに、あたし人生を半ばに自動車と衝突して死ぬたあな」

「そんなこと言ってお前ルーズスクラムの中でぼやぼやするな。首の骨くらいすぐだぞ」
仲間は勝手なことを言っている。

武馬は上着を脱ぎかけていた手を置いて考え込んだ。

「練習止めていって見るか？ 死んでなくたって危篤てえなら面会謝絶だろう」

「あいつにお前みたいないな友だちがいると思わなかったな」

「いや俺より、奴が死ぬならその前に会わしてやりたい人間がいるんだ」

入って来た主将に訳を言っ部屋を飛び出した。

赤坂に戻りながら、

「馬鹿な奴だ！」

胸の中で幾度も武馬は思った。

家へ戻ってお師匠さんに、

「杉がタクシーと衝突して大怪我しました。危篤だそうです」

「えっ」